

信州美術界を担った作家たちへの私的な追憶

中嶋嶺雄

自然と文化の根拠地

松本市民をはじめとする郷土の皆さんの期待に応えて平成14年に開館した松本市美術館は、すでに数多い地方美術館のなかでもユニークな存在として好評を博している。その松本市美術館がこのたび松本市制100周年を記念して、明治期以来の松本平ないしは中信地方で活躍した美術家たち約130名の作品展を企画し、作品集を刊行するという。

地方の時代と言われるこれからの日本社会にあって、その地方がいかに豊かな文化を蓄積しているかが問われるだけに、今回の試みは、きわめて先駆的な意味を有している。そして松本平と中信地方は、北アルプスや安曇野、松本城、開智学校、旧制松本高校などに象徴される自然と文化の色彩に富んだ歴史的根拠地であり、この地に足跡を残した作家たちは、おのずと日本を代表する存在、ないしは近代日本の内的な文化力の担い手であったといえよう。

中信美術会の航跡

市制100周年の本年は昭和23(1948)年に中信美術会が結成されて以来の60周年でもあるとのことだが、松本地方では、戦後の混乱期にいち早く美術界が活動を開始したのであった。のちにスズキ・メソードとして世界に広まった才能教育研究会の前身、松本音楽院が鈴木鎮一氏を中心に設立された時期とほぼ期を同じくして、松本市の芸術運動は始まった。

特に美術界にとっては、世界的な陶芸家パーナード・リーチが薄川上流入山辺の鉱泉旅館・霞山荘に投宿していたり、洋画界の重鎮で日本芸術院会員の石井柏亭画伯が浅間温泉に疎開されていたことなどが、活動のモチベーションを刺激したように思われる。現に中信美術会は単に中信地方のみならず、信州美術会の中核として、長野県展の開催にも中心的な役割を果たしていたのであった。今私の手許には、私自身の二度目の県展入選作品「石膏とヴァイオリン」

が目録に出ている【第五回長野県展】と題する小冊子(信州美術会、昭和27年9月17日発行)が残っているけれど、その編集兼発行人は浅間におられた関四郎五郎氏であり、表紙は柏亭画伯の柿枝のスケッチで、そこに寄稿されている石井柏亭「全信州美術展」と題する文章によると、「終戦直後の美術活動としては長野県が最も早い方であったろう」という。当時は農村文化の建設が叫ばれ、長野県農業会が積極的に支援したのであった。

こうした経緯ののちに中信美術会が発足し、毎年5月には中信美術展が、9~10月には長野県展が県内各地で開催されたのであるが、中信展も県展も公民館や博物館が、時には地元の学校などが会場であって、美術の盛んな松本に美術館をとこの夢は、当時の作家や美術愛好家に共通した強い願いでもあった。

石井柏亭画伯の思い出

戦争中から戦後にかけて、信州にはわが国の美術界を担う錚々たる作家が疎開したり、また信州の自然に惹かれて住み着いていた。日本画の伊東深水、児玉希望、奥村土牛、洋画の石井柏亭、有島生馬、中川紀元、小山敬三、中村善策、彫刻の石井鶴三、清水多嘉示らである。これらの重鎮が信州美術会を組織したのであったが、なんといっても石井柏亭の存在感は大きかった。

ところが、その柏亭画伯に私は子供(小学校5~6年生)の頃から、まったくの裸で接する光栄に与ったのであった。柏亭先生は当時、浅間温泉の湯坂を登った右手の横通りに面し、裏手の山を背にした「せんきの湯」に疎開しておられた。「せんきの湯」は一般の旅館ではなく、ごく限られた湯客しか入れない上品な宿であった。ご亭主は確か滝澤弁護士といったと記憶しているが、奥さんがわが家と懇意で、市内の中町二丁目目薬局を営んでいたわが家はしばしば入浴させてもらったり、お客をもてなすのに使わせていただいていた。小池町の停留所から路面電車に乗

って今の市立美術館の前を通り、浅間の終点で降りて坂を登って行ったものである。

そのような折に私は玄関脇の檜の香のする浴場で、時折、柏亭先生とご一緒になった。太った大きな体躯の胡麻塩頭に立派な髭を八文字にたくわえられていて、裸であればなおさら、近寄りたがひ霧気気の大人(たいじん)であった。ある時など、柏亭先生のスリッパが着替えをしていた私の近くにずれてきていて、足でさっとさらっていかれたのをよく覚えている。そんな柏亭画伯にとって当時子供の私の存在感がなかったのは当然であるが、私の方は立派な大画家であることを知っていて、柏亭先生のお留守中にアトリエになっていた部屋を母と一緒にそっと覗かせてもらったこともあった。長い坂の廊下の奥の中庭に面した明るい部屋であった。

それから暫くして、幼稚園の頃から画が上手だとよく褒められていた私が新制の中学2年生の時に第3回中信美術展に応募して入選し、なんとその展覧会場で柏亭画伯から「夜の書棚」と題



「夜の書棚」 昭和25年 第3回中信美術展

する20号の私の水彩画を、「暖かい色感がよい。このまま是非続けなさい」とお褒めいただく機会を得たのであった。昭和24(1949)年5月、場所は松本城の脇にあった松本博物館、朝鮮戦争勃発直前の頃である。

その機会を作ってくださったのは、一水会系の洋画家で松本平をこよなく愛し、晩年には山岳画家としても知られるようになった古市幸利先生である。

古市先生と白山卓吉先生

私が古市先生に画を習い始めたのは、確か昭和23(1948)年の秋、源池小学校6年生のときであった。たまたまわが家(薬局)に立ち寄られた古市先生に、学校の宿題で描いた水彩画を見ていただいた。それは薄川にかかる逢初橋と白銀の北アルプスの風景であったが、それを機会に私は先生に画を習うことになった。静物のデッサンをしたり、安曇野へ写生に連れて行っていただいたり、影の部分で黒色絵具だけで表現してはならないことなど基本を懇切丁寧に教えていただいた。こうして清水中学2年生のときから中信展に毎年連続入選することとなり、松本音楽院で鈴木鎮一先生に習っていたヴァイオリンを題材にした水彩画で、中学3年生からは県展にも連続入選した。

古市先生は四国の香川県が故郷で、信州の自然に魅せられて松本に定住されることになったのだが、小柄な体躯に鼻眼鏡で足まめにあちこち出歩かれては画を描かれていた。その当時、絵筆一本で生活を支えるのは並大抵のことではなく、かなり多作であったのも、作品が売れやすいように写実一本であったのも、また素敵な観光ポスターや北アルプス、美ヶ原などの絵葉書を沢山残しておられるのも、生活の糧を得るためであったのではなかろうか。寒い日など、写生から戻られて好きなお酒をわが家でちびりちびり呑まれるのが大層楽しそうであった。

古市先生はそのころから一水会や日展に出品

されていて、石井柏亭画伯を師のように仰いでいた。当時は信州画壇にも国画会や春陽会さらには二科会などの影響が強くなり、とくに国画会の宮坂勝画伯の活動や影響が目立ち始めていたが、古市先生は宮坂画伯にはまったく同調せず、私は宮坂氏の絵にも魅力を感じていただけに、かなり困惑したこともあった。



「ヴァイオリンのある静物」 昭和26年 第4回中信美術展

そんな折に、私は油絵ではなくもっぱら水彩画だったので、やはりわが家によく来られていた池田町出身の水彩画界の大御所、白山卓吉(本名・寺嶋理吉)先生にも指導していただくことになった。当時の先生は日本水彩画会の重鎮であり、信州美術会の副会長もつとめられていたはずなのに、まさに清貧に耐えて画業に専念されていた。先生の水彩画は、実に色感が豊かで筆使いが伸びやかであり、同時にどことなくウィットに富んでいる。奥様の月草道子さんも洋画家で、草花をモチーフにした清楚な作品を描かれていたが、お二人がアトリエ兼用でお嬢様方と住んでいたのは、清水町の土蔵であった。生活を支えるためにやはり多作であったが、老齢にもかかわらず文学青年のような気概をつねに持たれていた。それでいていささかシャイで、黒メガネの長身にベレー帽をかぶり、いつも飄々としておられた。

白山先生が昭和26(1951)年と同27(1952)年に高島仁、山崎健三、手塚恒二の諸氏を同人とし

て開いた松本水彩展には私も静物などの作品を出品させていただいているが、その第二回展のカタログの表紙は、会場の公民館のある四柱神社正面の石の太鼓橋風景を描いた白山先生の洒落たイラスト画である。当時私が編集責任者として先生にお願いした清水中学校の校誌『窓』創刊号の表紙のイラストも同様に素晴らしかった。

わが家が倒産した松本深志高校1年生の時に製薬会社に救済を求めるべく単身上京した折に日比谷公園で描いた画は、「都心の憂鬱」と題して中信展で奨励賞をいただいたが、純粋な写実を脱しようとしたものであった気がする。

中町界隈の芸術家たち

私が生まれ育った松本市中町(二丁目)が今「蔵のある町」として観光名所にもなっているのは喜ばしい。間口が狭く奥行き長い典型的な町屋風のわが家にも土蔵が二つあったが、人手に渡ってからは取り壊されてビル風になってしまった。

その中町には多くの美術家がいた。一丁目の民芸品店ちきりやは、バーナード・リーチや柳宗悦と親交のあった「ちきりや紙店」のご主人、丸山太郎さんが開かれていたが、早世されたお嬢様が私の同級生であり、卵の殻を用いた民芸細工の作品がとても美しかった。

小池町への入り口を挟んで斜め前には「人形屋」があって、そのご主人は彫刻家の太田南海先生であった。瘦身に老眼鏡をかけた南海先生は、いつも髻(のみ)で仏像を刻んでいたが、いかにも芸術家肌のこわいおじさんといった感じであった。同時に本業の人形造りでは祭りの舞台(山車)の人形もつくられ、中町一丁目の舞台の人形は南海作だったように記憶している。

中町には私も習った書道の真野竹堂先生もおられたが、中町界隈によく出没されたのが洋画家の滝川太郎画伯である。滝川氏の油絵は、写実的でありながら筆使いが大層奔放で、色調も明るく艶のある作品だったと記憶しているが、

永いフランス滞在中にルノアールの名画「少女」などの贋作作家になったのではないかとのちにわが国画壇やマスメディアで大きな話題になったことでも世に知られた存在であった。その滝川氏は中町に近い天神に生まれ、縄手の蕎麦屋・弁天楼の「小僧」になったこともあるとのこと、わが家にはよく薬を買いに来ていた。緑色のベレーに鮎色のロイド眼鏡で、ちょび髭の似合う紳士然とされていたが、いつも酒の匂いが漂っていた。

その滝川画伯は、西堀の映画館セントラル座の地階で印刷発行していたローカル紙『信陽新聞』に美術批評を書かれていた。昭和26(1951)年10月14日の「県展を観る 滝川太郎(二科会員=松本市在住)」という文章の冒頭は、こうなっている。「若い作家に大いなる期待を以って観る。未完成でも強靱な萌芽により喜びをもつ。県展洋画部の若人が、中央に比肩し得る水準に在ることは、主として技巧の部分において看取される。然し、より以上の根本問題たる、如何に感激し表現し様としたかという筆を執る以前のその感度の震情がうつところは案外弱い。」若手を鼓舞するとともに、厳しい批評を展開されている。このコラムに登場する「県展洋画部の若人」は、堀内康司、塩沢久要、渡辺惺子、北野太郎、高原岩雄、中嶋嶺雄、金光義朗、柳沢健、堀金泰、本庄規素、平林慎一郎、西沢洋、福沢昭夫、大須賀政一、月草道子、井上武美、宮浦真之助、西片良一、平林伸泰の諸氏であり、当時満15歳の最年少であったことによるのか、私についてのみ二度も言及している。これらの諸氏の中からは、やがて画家として大成され、活躍されている方々も多く出ているのではなかろうか。当今の美術批評によく見られる持ち上げ批評とは異なる、きわめて厳格な論評であった。

中町のわが家によく来られた画家で忘れられない存在が、夭折した信州日本画壇の鬼才、山口蒼輪先生である。やや神経質な風貌の蒼輪画伯は、北アルプスの山裾、当時の烏川村岩原か



「都心の愛鬱」 昭和29年 第7回中信美術展 奨励賞

ら出てこられ、私の父とよく話し込んでいた。安曇野の大庄屋で代代名村長の家系の山口邸は、江戸時代初期の壮麗な書院風の大庭園になっていて、そこで描かれた作品を持参されていた。わが家には蒼輪先生の石楠花や紅梅の掛け軸や色紙が、父宛ての自筆の絵の年賀状などとともに何点か残っている。

以上は私の郷里松本での少年時代の思い出の一端をたどったものであるが、多くの優れた芸術家に早くから接して、私は幸運であった。今でも海外旅行や年1回ほどの北アルプス登山に際しては、絵具とスケッチブックを忘れないことにしている。私の絵心を育ててくださった郷里の亡き先生方に厚く御礼申し上げたい。

2007年3月1日 松本・望岳山荘にて
(国際教養大学理事長・学長)